

題目 恋人保持方略に及ぼす関係流動性と男性の配偶価値の交互作用効果

氏名 沼田真里奈

指導教員 結城雅樹

本研究の目的は社会生態学的要因である関係流動性と、個人要因である配偶価値との交互作用効果が恋人保持方略の採択度および方略の使い分けに与える影響を検討することである。恋人保持方略には、相手が関係にとどまるインセンティブを高める利益提供方略と、パートナーの配偶機会を制限するコスト賦方略があるとされる。Miner et al. (2009) は、配偶価値の高い男性は利益提供方略を、配偶価値の低い男性はコスト賦課方略をとることを示した。ではこうした方略は果たして社会普遍的に重要であるのか。また、男性の配偶価値による方略の使い分けは社会普遍的にみられるのだろうか。この問いに答えるために、本研究ではマクロレベルの要因である関係流動性と、マイクロレベルの要因である個人の配偶価値との交互作用効果に着目し、社会の流動性によって恋人保持方略の採択度および、個人の配偶価値に基づく方略の使い分けが異なるだろうとの仮説をたてた。恋人の奪い合いが激しい高流動性社会では恋人保持方略の必要性が高まり、配偶価値による方略の使い分けが起こるが、反対に低流動性社会では恋人の奪い合いが生じにくいいため、恋人保持方略の必要性が低くなり、その結果配偶価値による方略の使い分けは起こりにくいだろうという予測をたてた。また、恋人保持方略に関わる要素として嫉妬感情とソシオセクシュアリティの検討も行った。仮説検証のために、関係流動性が異なる日本とアメリカで、配偶価値の異なる人々を対象に国際比較研究を行った。日米の参加者はクラウドソーシングサイト Lancers（日本）および Amazon Mechanical Turk（アメリカ）で募集し、参加者数は日米ともに 150 名ずつ募集した。研究の結果、予測通り低流動性社会に暮らす日本人男性よりも高流動性社会に暮らすアメリカ人男性の方がより恋人保持方略をとることが明らかとなった。また、男性の配偶価値が高いほど利益提供方略を、配偶価値が低いほどコスト賦課方略をとるという結果が得られ、Miner らの先行研究の結果を再現することができた。しかし、関係流動性と配偶価値の交互作用効果については予測に反し、利益提供方略では交互作用効果が見られず、コスト賦課方略では、高流動性社会のアメリカよりも低流動性社会の日本のほうが、配偶価値による方略の使い分けが大きいことが示された。さらに、嫉妬感情の強い男性、またソシオセクシュアリティの高い女性と交際している男性ほど恋人保持方略をとることが示された。